地底魔城の夜

地の底に閉ざされた城にて

涼崎あやめ

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=23136389

ヒュンマ, ヒュンケル, マァム, ダイの大冒険, 闘志と天使の後夜祭

【BOOTH】ヒュンマフェスの期間中（2024年10月4日（金）22：00～10月6日（日）21：00）
中綴じ印刷用PDFを無配します
https://ayame-ryosaki.booth.pm/items/6159786

Table of Contents

地の底に閉ざされた城にて

　地の底に閉ざされた城は、時間の感覚を麻痺させる。
　私を幻想的な世界へと誘（いざな）うように、松明はゆらゆらと揺らめいて石の壁に複雑な陰影を描く。
　亡者の群れが列をなして地の底へと還ってゆく。
　まるで現実感のない光景だったけれど、少しでも動かせばギシリと痛む腕が、これは現実なのだと私に知らしめていた。

　ロモス王国のあるラインリバー大陸から海路でパプニカ王国のあるホルキア大陸に到着した私たちを待ち受けていたのは、破壊されたパプニカの港町と神殿、そして、アバン先生の一番弟子であり魔王軍不死騎団長――ヒュンケルだった。

　そして、私は今、虜囚として不死騎団の本拠地である地底魔城の石牢に閉じ込められていた。後ろ手で縛られ、母から譲り受けたハンマースピアも、アバン先生からいただいた魔弾銃も取り上げられている。
　これでは、いかに古びてひび割れているとはいえ、石壁を壊して脱出することは不可能だろう。

　鉄格子越しの廊下をひっきりなしに行き交うのは、アンデッド系怪物（モンスター）の気配だ。カラカラと軽い音は、がいこつの骨同士がぶつかる音だろう。何かを引きずるような重い音は、ミイラおとこの歩く音らしい。
　時折、がいこつけんしのがらんどうの目が私の存在を確認するように牢の中を覗き込む。その度に、私は「逃げも隠れもしないわ」とキッと睨み返した。

それでも、厳しい戦いにくたびれた肉体は睡眠を欲していて。
　私は、なるべく牢の奥の場所を選んで、石の床に横たわった。
　敵陣の真ん中であることはわかっていたけれど、睡魔には抗えなかったのだ。

　もし、私を殺すつもりならばとっくに殺しているだろう。おそらく、私はダイとポップをおびき出すための人質。
　であれば、しばらくは生かされているはず。

　それに、私の人質としての価値を期待して捕らえられているならば、きっと二人とも上手くヒュンケルから逃げおおせたということなのだろう。

　私が最後に見たのは、ヒュンケルの凄まじい必殺剣ブラッディースクライドになす術（すべ）なく倒れた二人の姿だった。大きな怪我などしていないだろうか。無事だと良いのだけれど……。
　何一つとして推測でしかない状況に歯噛みすれども、眠らなければ体力だって回復しない。

　少しだけ、仮眠をとろう。
　そう。ほんの少し——。
　閉じかけた瞼の端を黄金色の光が一瞬、横切ったような気がして……そこで、私の意識は途切れた。

§　　　§　　　§

　目が覚めたら全てが夢だった、なんて都合の良いことが起きるはずもなく、目を開けても、相変わらず私は冷たい石床の上に転がったままだった。
　後ろ手に縛られ続けているせいで、腕がじんじんと痺れている。
　それにしても、いつまでこの体勢でいなければならないのだろうか。

腹筋を使って起き上がった私は、ふと、違和感に気づいた。
「……え？」
　石牢の壁は、こんな感じだっただろうか。確か、もう少しヒビ割れていたような……。
　それに、あれほど歩いていたはずのアンデッド系怪物（モンスター）の気配を廊下に感じない。

　違和感の正体を突き止めようと、とりあえず壁ににじり寄ってまじまじと眺めようとしたその時だった。

「あんた、誰？」
　凛とした誰何（すいか）の声が石牢に跳ね返った。

　振り返ると、そこにいたのは七歳くらいの少年だ。銀色の髪にダークブラウンの瞳をしたその少年に強い既視感を覚え、私は思わず口をポカンと開けてしまった。

　だって、その銀色の髪やダークブラウン色の瞳には、あまりにも見覚えがあったのだから。
　それもそのはず。ついさっきまで、図らずも敵として対峙していた相手に、目の前の少年は信じられないくらいに良く似ていたのだ。

　だけど、私が知っているのは眉目秀麗な青年であって、こんな幼い少年ではない。
　一体、どういうことだろう。
　そういえば、昔、アバン先生に『時を操る力を秘めた砂』の話を聞いたことがあるけれど、まさか、その効果で若返った……なんてことがあったりしたのだろうか。
　そんな馬鹿な。
　第一、ここは石牢の中だ。一体、どうやって少年はこの牢の中に入り込んだのだろうか。

あまりの混乱に声も出せない私をどう思ったのか、少年は不審げに眉を顰めた。
「人間……？」
　混乱しているのは、どうやら私だけではないらしい。
　自分よりも混乱している人間を見ると、何だかかえって冷静になれるのは何故だろう。
　少年が「何で、こんなとこに人間が？」とでも言いたげに困惑しきっているのを見て、私は我に返った。
　目の前の少年はミーナと同じくらいの年齢だ。私が不安そうな顔をしたら、きっと、この子も不安になるだろう。

　ふ、と息を吐いた私は、努めて冷静に、だけどミーナに話しかけるときのように彼の目を見てゆっくりと口を開いた。
「えぇ、そうよ」
　私が答えるとは思っていなかったのかもしれない。少年は、目を丸くして、それから、私の顔をまじまじと見た。
「あなた……お名前は？」
　だけど、尋ねる前から、私は目の前の少年の答えを知っているような気がした。

「ヒュンケル！」

「ヒュン……ケル……」
　やはり、彼はヒュンケルなのだ。
　ということは、ここは、まさかヒュンケルが幼い頃の地底魔城とでも言うのだろうか。
　でも、確かにそうだったら、目を閉じる前の私がいたはずの地底魔城とはどこか様子が違うことにも説明がつく。

　私が『ヒュンケル』という名前に反応したことに気づいて、少年――ヒュンケルは、得意満面の笑みを浮かべた。
「昔、魔界にいた伝説の剣豪の名前なんだって。父さんが付けてくれたんだ」

彼自身に聞いたばかりの名前の由来を、今また、ここで聞くことになるとは思わなかった。
「良い名前ね……」
「そうだろ！」
　嬉しそうに大きく頷く彼は、年相応の子どもだった。哀しみを帯びた冷笑に彩られたあの男と本当に同一人物であるのかを疑ってしまうくらい、それは無邪気な笑顔で。

「お父さんのことが、大好きなのね」
「うん！」
　素直に頷いたヒュンケルは、暗い石牢の中でもわかるくらいにキラキラと目を輝かせた。
「父さんは、すごく強くて優しいんだ！」

　溌剌と笑ったヒュンケルは、ふと、何かに気づいたように私を見上げた。
「ところで、あんたは何でここにいるんだ？」
　どこまで真実を伝えて良いのだろうか。というより、本当は私にも今の自分の状況が正確にはわかっていないのだ。
「えぇと……魔王軍に捕まえられたっていうか……」
　考えあぐねた末に、ようやく口から出てきた歯切れの悪い私の話は全くの嘘というわけではない。だからか、どうにか目の前の聡明そうな少年を誤魔化すことができたようだった。
「ふぅん？　ヒトジチ、ってヤツ？　だから、こんな誰も使ってない牢屋の中にいたのか」
「誰も使ってない牢屋？」
「そうだよ」
　ということは、やはり、ここは少なくとも私がいたはずのあの（・・）地底魔城ではないのだろう。

「あの……あなたは、ここで暮らしているの……よね？」
「うん」
「でも、あなたは人間で……」

私の言葉をヒュンケルは途中で遮った。
「わかってる。父さんは地獄の騎士だし、ここは魔王様のお城だ。だけど、ここがオレの家で、父さんや怪物（モンスター）の皆はオレの大事な家族なんだ」
　私には、何も言うことができなかった。彼の大好きなお父さんを、家族を奪ってしまったのは、アバン先生と私の両親なのだから。

　急に項垂れた私を見て、ヒュンケルは慌てたようだった。
「縛られてるから、痛い？」
　もちろん、痛いのは腕だけではなかった。
　けれど、幼いヒュンケルの思いがけない優しさに慰撫されたような気がして、私は無理矢理に笑顔を作る。
「それは……そうね、正直に言えば少し痛いわ」
「外そうか？」
「え？」
「父さんがいつも言ってるんだ。女の人を大事にするのが武人のココロエなんだ、って」
「武人……」
　ヒュンケルの真っ直ぐな瞳に、私は「女を殺すなど性に合わん」と言い放った彼の姿を鮮明に思い出した。
　あれは、きっと彼の父親——地獄の騎士バルトスの教えだったのだ。

「でも、見つかったらあなたが叱られるんじゃない？」
「平気だよ」
　フフン、と鼻で笑いながらそう言って、ヒュンケルは私の腕の縄を解いてくれた。
　久しぶりに得た自由を満喫すべく、私は立ち上がって伸びをする。腕を回し、関節を痛めていないかを確認した。幸いなことに、どこにも痛みはない。
　ヒュンケルは、ストレッチをする私を興味深そうに眺めていた。

「そういえば、ヒュンケルは何故、使われてない牢屋なんかに来たの？」
　ふと気になった私は、彼に尋ねてみる。
　考えてみれば、石牢の鍵なんてそうそう都合よく子どもが持っているものなのだろうか。
「え？　えっと……」
　急に私から目を逸らそうとするバツの悪そうな顔は、しでかしてしまった悪戯を隠そうとする子どもの姿そのものだ。ネイル村にいたときに、近所の子どもがよくそんな顔をしていたような気がする。

「怒ったりなんかしないわ」
「本当？」
「えぇ。誰にも言わないわ。二人だけの秘密にしておくわよ」
　そう言うと、ヒュンケルは少しだけホッとしたような顔をした。さっきも「平気だよ」と強がってはいたけれど、本当は、怒られるのが怖いのだろう。
　微笑ましさに、つい頬が緩む。

　誰にも言わないで、とヒュンケルが内緒話で教えてくれたのは、いかにも子どもの冒険心を擽るようなこの城の秘密だった。
「……あのさ、この城に、隠し部屋があるって聞いたことがあるんだ」
「隠し部屋？」
　神妙な顔をしたヒュンケルは、重大な秘密を打ち明けるように声を潜めた。
「うん。父さんは、そこに何か『大事なもの』を隠してあるんだって」
「その隠し部屋を探そうとしていたの？」
　ヒュンケルはコクリと小さく頷いた。
「父さんが何を隠しているのか、気になったんだ」
「お父さんに、直接聞いてみれば良いじゃない」
「でも、内緒で立ち聞きしてたから……」

後ろめたさを滲ませたヒュンケルは、しゅん、と下を向いてしまった。
「そうだったの。でも、今頃お父さんは、あなたがいなくなった、って心配してるんじゃないかしら？」
　私の言葉を耳にした途端、急にヒュンケルは元気を取り戻し、得意そうに胸を張って請け負った。
「こっそり寝床を抜け出してきたから大丈夫！　父さんは、きっとぐっすり寝てるって思ってるよ」

　涼しい顔をして、とんだ悪戯小僧だ。
　どうやら、この牢の鍵も、抜け出す時にこっそりと拝借してきた鍵束の中にあったものらしい。

　そうして、彼は語ってくれた。
　この部屋に辿り着くまでの誰かに見つかるかもしれないというスリルに満ちた冒険の道筋。
　小さくなってしまったじんめんじゅ（キギロという名前らしい）に水やりをしていた時のじょうろの色。
　誰よりも大好きな父親が、ヒュンケルがプレゼントしたピカピカの星の首飾りをいつもつけてくれている誇らしさ。
　怪物（モンスター）との地底魔城でのかくれんぼ。最近、父親に剣を教えてもらえるようになったこと――。

　胸が痛かった。
　今が、いつ（・・）の地底魔城なのか、私にはわからない。
　だけど、遠からずここは血なまぐさい戦場になるのだ。
　そんな私の心の声が聞こえたのだろうか。

「……でも、もうすぐここには人間の勇者が攻めてくるんだって」
「ッ」

　平坦な声でヒュンケルが告げた内容に、ヒュッと喉の奥が閉まったようになって、一瞬、息ができなくなった。

やはり、この地底魔城には、もうすぐアバン先生と父さん、母さん——勇者アバンと戦士ロカ、僧侶レイラがやってくるのだ。魔王ハドラーを倒しに。

「でも、父さんは絶対に負けない！」
「ヒュンケル……」
　私の気遣わしげな声に、ヒュンケルはムッとしたように声を張り上げる。
「だって父さんは魔王軍の中で一番強い剣士なんだ！　父さんが人間の勇者なんかに負けるもんか！！」

　だけど、そうやって勇ましく啖呵を切ったヒュンケルの拳は、握りしめすぎて真っ白だった。

　きっと、不安なのだ。こんなに小さな身体で、彼は今、一生懸命に不安と戦っているのだろう。
　父親の『大事なもの』を探そうと思ったのも、父親を喪うかもしれないという恐怖を、彼なりにどうにかしようとしてのことなのかもしれない。

　強い子だ。
　それに——優しい子なのだ。

　思わず、私はヒュンケルを抱きしめた。
「ッ？」
　ヒュンケルは驚いて、一瞬、身体を硬直させたけれども何も言わず、ただ私に抱きしめられるままでいてくれた。

　私が彼に何かできるわけではない。
　そもそも、ここが私の予想通りに過去の世界なのだとしたら、この結末を変えることはできない。
　もし、過去の世界でなかったとしても、この世界の人間ではない私に一体何ができるだろう。

結局、私は近い将来の彼の身に起こることを伝えることはできなかった。
　だけど――それでも、これから彼の身に何が起こるのかを知っていて、何も伝えないことなんて、私にはとてもできなかった。
　この先に起こり得る未来への予兆を薄らと察して怯えている彼に、何もできず、ただ、祈ることしかできない自分自身が情けなくて、不甲斐なくて。

　込み上げてくる自分自身への怒りをどうにか鎮め、私はヒュンケルの身体を離して彼の両肩に手を置き、震えそうになる口唇を叱咤して開いた。
「あなたは強い人になるわ、きっと。お父さんにも負けないくらい強い人に……！」
　そう、祈るように告げることが今の私の精一杯で。

　ヒュンケルは驚いたように目を瞬かせたけれど、「うん！　絶対になるよ！」と顔をくしゃくしゃにして笑ってくれた。
「負けないで……あなたは、とても強い人なのだから」
　この言葉が、もうあなたの隣にいられない私の代わりに、あなたの心を少しでも護ってくれますように。
　そんな願いを込めて――。

　それにしても、色々なことが一度に起きた一日だった。
　ホルキア大陸に上陸して無残に破壊され尽くした街を目の当たりにし、絶望と落胆も癒えぬままヒュンケルと出逢い、戦って……。
　そして、囚われの身となって眠ったはずの私は、気づいたら過去の地底魔城らしき場所にいる。

　果たしてこれは夢なのか、それとも現実なのか。もし、現実だとしたら、私はここから無事に帰ることができるのだろうか。
　考えなくてはならないことは山ほどあるのに、疲れのせいだろう

か。何だか、頭がうまく働かない。

　そういえば、さっきから何だか妙に静かだわ、と思ったら、近くに座り込んでいたヒュンケルも、いつの間にかこっくりこっくりと船を漕ぎ始めていた。
　きっと、彼も真夜中の大冒険にくたびれてしまったに違いない。

「こちらへいらっしゃい」
　そう言えば、ヒュンケルは素直にやってきて、壁を背にして座った私の隣に腰をおろす。
　隣から、くぁ、と小さなあくびが聞こえてきて、緊迫した心境とは裏腹に、私は思わずクスリと笑ってしまった。

　地下牢には暖を取るための毛布などない。
　本格的な睡魔に身を委ね始めたヒュンケルに肩を貸す。子どもらしい高い体温が温もりとなって、肩からじんわりと広がっていくようだった。
　きっと、彼の父親——地獄の騎士バルトスも、ヒュンケルの温もりをこんな風に愛しく感じたに違いない。
　だからこそ、ヒュンケルはこの地底魔城で健やかに育つことができたのだろう。

　こうして、魔物だらけのあたたかな城で、たった二人ぼっちの人間である私たちは密やかに肩を寄せ合い、そっと眠りに就いたのだった。

§　　§　　§

　目を開ければ、そこは、やはり冷たい石牢の中だった。
　だけど、私の両手は後ろ手に縛られ、確かに肩に触れていたはずの温もりは、跡形もなく消え去っていて。

「ゆ、め……？」

不意に小さなヒュンケルの真っ直ぐな瞳を思い出す。
　そして、ヒュンケル自身が語った彼の来し方の片鱗も。
　あの澄んだ少年の瞳は、一体、どんな経験を経てあんなにも憎しみと哀しみを孕む荒んだ色を宿すようになったのだろうか。

「そういえば、探していたっていう隠し部屋は、結局、見つかったのかしら」
　バルトスがその部屋に隠したという『大事なもの』とは、一体、何だったのだろうか。そして、ヒュンケルは地底魔城を後にする前に、無事にその『大事なもの』を見つけることができたのだろうか。
　気になったけれど、それを確認する術（すべ）は私にはなかった。

——次にヒュンケルに会ったとき、尋ねてみようかしら。

　何故だろう。今は敵対している私たちが、いつの日か、あたたかな日の下で穏やかに語り合う日が来ることを私は確信していた。

　地の底に閉ざされた城にて、囚われたままの彼の魂との邂逅を果たす日が、きっと、いつか——。